

2010 年度大阪大学 言語社会学会・言語文化学会 合同研究発表会 (大阪大学言語文化学会 第 38 回大会)

第 1 室 (旧棟 1 階 大会議室)

朝鮮統治期 (1910-1945) 日本の婦人雑誌に描かれた植民地朝鮮の表象 : 『婦人画報』を中心に

桜木 一紀

本研究は朝鮮統治期 (1910 - 1945) の日本において婦人雑誌という媒体を通して主に女性層に伝達された植民地朝鮮像の特性の解明に寄与することを目的とする。当時発行された各種テキストから植民地朝鮮像を読み解こうとする研究は主に韓国で行われている。これらは主に女性学の視点からなされており、各種テキストに掲載された写真や広告、記事の分析を通して植民地朝鮮における女性の生活像を明らかにすることを目的としている。先行研究の意義は「モガ」と「新女性」または日本女性と植民地朝鮮の女性の表象を比較してその特徴を明らかにした点であるが、それらは一つの概念のテキストでの扱われ方を主な分析対象としているため、婦人誌における植民地朝鮮の全体像の特徴を提示できないという点を共通の課題としている。そのため、本研究は主に「画報」と「読物」で構成されている『婦人画報』の電子データベースを活用して、植民地朝鮮に関する言及内容を時代別掲載数、掲載形式、主題、テキスト生成者という視点から分析して植民地朝鮮像の特徴を考察した。

分析の結果、「画報」は旧朝鮮支配者一族関連のものが日本の皇族の肖像写真と共に掲載される傾向にある半面、一般庶民の生活や文化、風景に関するものは相対的に掲載数が少なく、写真家によって自然な様子が映し出されたものが大部分であった。「読物」は主に日本と植民地朝鮮の文化、風習、考え方の違いに関するものであり、それら社会的エリート層が生成したテキストの主な論調は日朝の異質化の改善及び同化を強調するものであった。掲載時期に注目すれば、日本と植民地朝鮮の間で特別な意味を持つ事件が起きた場合や日本を取り巻く国際状況が厳しくなっている状況下において朝鮮に関する情報が集中的に掲載されていることが分かる。分析結果を総合すると、朝鮮に関する情報は日本と植民地朝鮮の一体化をより促す目的で活用される傾向にあったことが分かる。

日本人と「残酷」ーイギリス『タイムズ』紙の日本関連報道からー

花井 晶子

2001 年にイギリスで『ブリジット・ジョーンズの日記』という映画が大ヒットした。その原作には日本人について次のような記述がある。 'Apparently he had the most terrible time with his wife. Japanese. Very cruel race.' (Fielding, H. [1996] Bridget Jones's Diary

Picador, p. 12) また、日本でベストセラーとなった『国家の品格』の著者藤原正彦は、その著『遙かなるケンブリッジ』の中で、イギリスの英語学校で配られた「イングランド人は各国をどう見るか」という一覧表で、「日本人＝残酷。働き蜂。」となっていると報告する（新潮社 p.121、1991）。（下線はともに発表者による。）一体イギリスでは、日本人は残酷な人種であるというイメージがあるのだろうか。身近な素材である新聞記事を例にとって、イギリスで日本人の残酷さがどのように伝えられているのかを検証してみたい。

実際に日刊紙『タイムズ』の 1975 年、1985 年、1995 年、2005 年の日本関連記事を探してみると、日本人の残酷さがさまざまに表現されていることが認められる。1975 年には日本赤軍派のテロ行為を報じる記事の中で「非道」と非難されたが、これについては多くの日本人が納得する見方と思われる。しかし 1985 年以降は、第二次世界大戦中の日本兵の「残虐さ」が繰り返し言及されている。また 1995 年では日本の刑務所での「野蛮な暴力」が訴えられ、さらにサムライ映画の影響を受けたと思われる「残忍性」が示唆された。2005 年では一見平和な日本社会の内面に、「残酷」が隠されているかのように描かれている。

記事の実例を提示して、彼らが日本人の「残酷」をどのように見ているのかを考えていきたい。

変革急務！日本の学校の英語教育——帰国生の視点から

五歩一 寿子 ・ 岡田 政士

本研究の契機は、今年五月豊中市後援事業の一環として開催された国際教育談話会である。本日の発表者達はその際報告者を務め、出席した帰国生保護者との交流から研究の必要を感じ、調査と本日の報告に至ったものである。

世界の各国また地域で育った後日本の学校に入ってくる「帰国生」にとって、日本独特のやり方が奇異に映ったり困難に感じられることはよく論じられる。今回の調査ではテーマを「英語教育」に絞り、彼ら帰国生の視点を分析し、日本の英語教育がいかに変わるべきかの提言として受けとめようと試みた。

調査の方式としては、豊能地区また東京で帰国生が一定数在籍する小・中・高等学校に通う帰国生あるいはその母親にアンケート用紙を配布し、以下の問いについての自由記述を依頼した。即ち、彼らが見た日本の学校での英語教育について①「日本の生徒はこんな事も知らないのか」②「日本の英語教員はこんな事も知らないのか」③「日本ではなぜこのように英語を教えるのか」と感じた事があれば聞かせて欲しいという問いである。

集計の結果、意見は音声学面では「日本の学校では **phonics** を教えない事」、また語用論上「教える表現が古いあるいは堅苦しい・実用性に欠ける事」に集約された。また言語社会学的観点からは「教える対象年齢への配慮が足りず内容が幼なすぎる・簡単すぎる」といった意見が見られた。

2011年度から小学校における英語教育が必須となるのを控え、これらの意見に耳を傾ける事は、学習者中心の英語教育を実現する為及び初等学校と中等学校における英語教

育の効果的な連携運動を図る為に有益かつ必要であるとの実感が得られた。発表者達は共に幼稚園レベルから社会人迄を対象に英語教育の経験を重ね、また海外(米国)での初等教育から高等教育にも直接関わってきたことから、調査結果以外の事例や体験も交え、提言につなげたい。

第2室(新棟2階 大会議室)

台湾における日本語借用語アクセントの変化：台湾語の声調との比較

田中研也

台湾人が外国語として日本語を発音する際には、ある一連の特徴があることが、早くも日本による植民地統治時代から指摘されている。本発表は、そのうちのアクセント型に見られる特徴に着目したものである。台湾人の発音では、本来の日本語における型と関係なく、先頭と最後以外のモーラ(または音節)が全て高くなるという、いわゆる「マイナス2型」をとる傾向がある。これは現在でも日本語学習者に広く観察される特徴であると言われており、「平板型(ゼロ型)アクセントが苦手」という学習上の困難に直結するので、原因や対策が常に問題となってきた。

この、語末でアクセント核が生じてしまう現象については、台湾語特有の声調現象に原因を求める研究が今まで行なわれてきている。例えば謝(1984)は、自らの発音を観察した結果、語の全音節が基底では声門閉鎖音で終わる低音の入声音であると仮定し、その後の音韻過程により「マイナス2型」が形成されると論じた。また張(1989)は、基底では語末が軽声となっているため、音量も高さも低く、短く発音されることにより、「マイナス2型」のように実現されるという説を述べている。

本発表では、日本語起源の借用語を見たところ、語末が入声や軽声で終わっているとは限らず、語末アクセント核の実現に関する上記二つの説では全てのデータを説明することはできないことを報告する。また謝の説についても、台湾語に見られる声調変化規則が重要な役割を果たすが、途中にあまり自然とはいえない音韻過程を仮定する必要があり、新しい観点からアクセント型実現のプロセスを見直す必要がある。

ロシア語動詞の新しい分類法 ——学習者の視点に立って——

菅谷広子

ロシア語動詞の不定形は大部分が[母音+ТЬ]に終わり、この不定形から末尾の[-ТЬ]を除いた形を不定形語幹という。また、動詞の現在形は、主語の人称と数の違いに応じて6つの形に変化する。この場合、6つの形に共通の部分を現在語幹といい、変化する部分を人称語尾という。つまり、動詞の現在形は、[現在語幹+人称語尾]により得られる。この人称語尾の変化には2つの型があり、それぞれ「I型動詞」、「II型動詞」と呼ばれている。

る。「I型動詞」とは不定形から[-тъ]を除いた現在語幹(不定形語幹に等しい)の後に、単数1・2・3人称、複数1・2・3・人称の順に人称語尾[-ю、-ешь、-ет、-ем、-ете、-ют]をもち、一方、「II型動詞」とは不定形から[母音+тъ]を除いた現在語幹の後ろに、人称語尾[-ю、-ишь、-ит、-им、-ите、-ят]をもつ動詞とされている。

しかし、「I型動詞」に分類されている動詞の中には、不定形から[-тъ]を除くことでは現在語幹が得られないものが見られ、「I型動詞」特殊変化として例外扱いされてきた。これら「I型動詞」特殊変化は種類も多く煩雑であり、多くの学習者は習得に困難を伴っている。「I型動詞」におけるこのような混乱状態は、人称語尾の違いのみに注目し動詞を2分類することに原因が認められる。そこで新たな分類方法として、現在語幹と不定形語幹(過去語幹)との関係、つまり、[-тъ]のみを除くのか、[母音+тъ]を除くのかに注目し、動詞をまずノーマルタイプ動詞とそれ以外に分類する。その後、人称語尾に注目し、従来の「I型動詞」人称語尾をもつI式タイプ動詞と従来の「II型動詞」人称語尾をもつII式タイプ動詞に分類する。なお、ノーマルタイプ動詞は従来の「I型動詞」人称語尾をもつ。

さらに学習者の筆記や記憶の利便性を考慮し、この新分類3タイプの別と力点の位置の情報とを盛り込んだ記号による表記を提案する。

背景の異なる日本語話者の初対面会話における参加者間の関係性

— 2つの会話データの比較からみえてくるもの —

中原京子

野田(2010)によると、応用言語学とくに社会言語学分野においては、近年とみにデータによる客観的分析結果が重視され、その方法論の確立が課題となっている。本発表では、従来の研究者の主観に左右される分析方法に、客観的データ計測を加え、この課題にひとつの解決を提示する。主にフットィングの有標性を探求する本研究では、背景の異なる日本語話者二者間の初対面会話について複数ケースにわたり一連の分析を行っているが、今回の発表ではその中の2ケースを取り上げ、分析結果の比較を行った結果、言語使用が左右する会話協力者の関係性がみえてきた。

今回の2ケースは、年齢、職業、社会的地位(ステータス)、出身地という属性の異なる2名の女性日本語話者の会話データを取り上げた。互いの背景情報を研究者の知己という以外知らされない条件の下、第三者に介入されない場所で約15分間会話を行い、会話はICレコーダにて録音された。データは全て文字化して分析資料とし、1) ターン・テーキング、2) ポジティブ評価・ネガティブ評価の語、3) フットィングの3つの項目について時間軸に沿って、三牧(2010)の枠組みによる小話題毎にカウントし、グラフ化した。

本研究の目的は、グラフに基づいたデータ分析とケース毎の比較により、グラフ中の数字に明示し得る参加者間の関係性と明示され得ない参加者間の関係性との両方に言及し、

フッティングの有標性を提示し、新たな方法論の探求を試みる。

参考文献

1. 野田尚史「ウェルフェア・リングィスティクスの研究に対する評価」、『社会言語科学会ニュースレター』第 29 号、社会言語科学会、2010、pp. 1-2。
2. 三牧陽子『初対面コミュニケーションにおける話題管理スキーマに関する日米中韓対照研究』、平成 19 年度～平成 21 年度科学研究費補助金基盤研究(C) 課題番号 19520458、研究成果報告書、2010。

ABOVE と OVER が表す上方義に関する一考察－英語空間辞の習得の観点から 大嶋ルリ子

本稿は、「上方」の意味を持ち用法の区別が極めて曖昧な *above* と *over* に着目し、空間関係を表すこれらの語を日本人学習者が習得する観点に立ち分析を試みる。

英語空間辞の中でも最も使用状況が複雑な *over* の空間義の中で、上方義は *above* との違いが極めて曖昧である。例えば、*The doorknob is directly above/over the keyhole.* においては、*above*、*over* 両方の使用が可能(Lindstromberg 1949)とされるが、*doorknob* と *keyhole* の関係を二者の距離関係をも含めどのように捉えるかにより、*over*、あるいは *above* のいずれか一方の使用しか認めないという解釈も考えられる。空間における二者の関係をどのように捉えた時に *over* あるいは *above* の使用が適切であると判断されるのか。母語話者と同じ直感が得られない日本人学習者がこれらの空間辞の使用の違いを理解するには、二者の上下の空間配置を *over*、*above* それぞれがどのように仲立ちするのかという明確な理解様式を提示する必要がある。

本研究では、主に辞書に記載されている用例を基に、使用状況を 5 つに分類し分析を試みた。まず、*above*、*over* いずれか一方のみ使用可能とされる状況と、共に使用可能とされる状況に分け、さらに、トラジェクター(参与者間で際立つ者：以下 **TR**)とランドマーク(参与者間で基点となる者：以下 **LM**)の距離関係に応じ、参与者間の関係を分析した。その結果、*above* と *over* の「上方義」の使用状況の特徴は以下の 2 点にまとめられた。

1. 距離に関係なく、**LM** より上で **TR** が **LM** を覆うように捉えられた場合には、*over* が使用される。
2. 距離に関係なく、**LM** より上で **TR** が点的に捉えられた場合には、*above* が使用される。

これらの結果を基に、学習者の理解を促すためには、**TR** に対し **LM** をどのように関連付けるのかというイメージを明確に提示する必要がある。また、中心的な意味特性が使用状況における解釈に大きく影響していることが考えられるため、*above* と *over* の中心義の違い

いも明確にした上で習得させることが重要であると考えます。

第3室（新棟3階 講義室）

Paul Auster の Man in the Dark にみる家族の肖像

江藤知美

Paul Auster の小説 Man in the Dark の主人公 Brill は不眠症を理由に夜な夜な物語を紡ぎ始め、Brick という Brill とは正反対の人物を産み落とす。彼らの差異は、老いと若さを体現するように必然と偶然という構成を成している。つまり Brill は長い間、「生」に悩み苦しんだ人物である。そして彼の生きる環境は必然の産物で、Brill はその必然の「結果」を生きていくしかない。一方で Brick は突然与えられた「生」を求め、運命に翻弄される人物である。更に、Brick は Brill が作り上げた必然を偶然に変換された世界でしか生きていけない。現実世界とパラレルワールドをつなぐ変換作業は Brill のみによって行われるが、この必然は Brill だけが作り上げたわけではない。現実世界においての必然にとって重要なのは孫 Katya を含む同居している家族の存在である。Katya は Brill 同様、最愛の人物を突如にして亡くし、失意のうちに過ごす。そして娘 Miriam も彼にとって Sonia を思い起こさせる最愛にして悲哀を感じさせる存在なのである。Brill の家族は彼をより一層深い闇へと葬る。このことが彼の構築するパラレルワールドに反映されることは無視できない。

また、この作品が現代アメリカ作家 Auster の作品としては新たな境地を表現していることに注目したい。この作品は Auster が得意とする推理小説でもなく、未知の世界を描いたわけでもない。Auster 作品では「家族」の存在を詳らかに、尚且つ主人公のすぐ外側に配置していることは極めて稀である。この小説は孤独のうちに秘めた家族の意味を Auster が描写した唯一の作品だと言える。

Maria Irene Fornes, Mudのなかの「病」

森 晴菜

Maria Irene Fornesの作品に登場する女性は、しばしば狂気を持っていると論じられる。しかしながら、Mud (1983)の主人公であるMaeに狂気は見られない。物語の中心は彼女をめぐる2人の男性、LloydとHenryの病と、彼女の葛藤である。そして、抜け出すことが不可能な彼らの絶望的状况がmud（ぬかるみ）として表現されている。

MaeはLloydとの貧しい生活から抜け出し、よりよい人生を求めて向上する希望を持っている。けれどもそれは、彼女が頼りにするHenryの突然の病によって絶たれてしまう。彼ら3人は擬似家族ともいえる共同生活を送っている。Henryの病でそのような3人の関係性は急激な変化を迫られ、遂には無理に家を飛び出そうとしたMaeはLloydによって銃で撃たれる結末を迎えるのである。

本発表では、彼らの関係性の変化を、病を中心に考える。どうしても抜けられない絶望的状况を彼らがどのように生き延びるかを探り、そこに、社会的に弱者として扱われる彼らが、アメリカ社会に抵抗する手段を読み取りたい。Fornesは自らの作品をフェミニズ

ム作品として読まれることを嫌っているが、彼女の作品はやはり女性を中心に論じられるべきである。また本作品では、Maeによって比喩的なエピソードが挿入されている。このようなFornesの演劇的手法にも注目しつつ、狂気の女性を描いてきたFornes作品への新たな読みを提示できれば幸いである。

キャバレー劇場「歪んだ鏡」におけるニコライ・エヴレイノフの上演活動について

篠崎直也

演出家、劇作家ニコライ・エヴレイノフの活動が最も旺盛だったのは、1910年より参加したペテルブルグのキャバレー劇場「歪んだ鏡」における上演活動であった。当時の象徴主義を中心とした作家、芸術家、俳優の実験的な作品の発表の場であった「歪んだ鏡」は、同時期に古代や中世演劇の復元を試みた彼自身の「古代劇場」という大きなプロジェクトが進行する一方で、エヴレイノフにとっても「Капустник (コミック寸劇)」のような自由な空間であった。

本報告では、「モノドラマ論」、「生活の演劇化」、「演劇の再演劇化」、「自分自身のための演劇」といったエヴレイノフの演劇理論が、実際の上演にどのように結びついているのかを『心の劇場』をはじめとした具体的な上演の分析をもとに考察する。20世紀における「演出家による演劇」の黎明期に自身で戯曲を書き、演出もしたエヴレイノフの上演作品はそのコンセプト、仕掛けそのものにこそ最大の特徴があり、そこでは俳優の身体とは全く別の次元で身体が個人の精神、自我と一体化して扱われている。

また、個人主義的、内向的性質の強い彼の演劇論は、その性質故に翻って全体主義的性質も併せ持っている。1920年代になると、プロレタリアート演劇の理論とエヴレイノフの演劇論は奇妙に重って再評価され、1923年にエヴレイノフが演出した群集劇『冬宮奪取』へと繋がっていくのである。

アーティストによる環境と共生する建築は実現可能なのか

ーフンデルトヴァッサーと安藤忠雄の建築作品の比較を通じて

野口 司

環境或いは自然との調和を謳ったフンデルトヴァッサーと安藤忠雄の両者であるが、現実に現れた作風は大きく異なる。フンデルトヴァッサーは、1950年代に画家として世界的名声を得、建築に対する宣言やアピールを行った。そして、1980年代に実際の建築計画に携わった。一方の安藤忠雄も、独学で建築を学び、「都市ゲリラ」を自身の建築活動の原点に据えるなど、両者とも建築家としては特殊な道りを経てきた。

発表者は、論文「歴史・文化の文脈から見たフンデルトヴァッサーの建築作品」を通して、彼の建築の思想的基盤が、ウィーン的な文脈上に位置づけられると同時に、戦時中

の過酷な体験を反映した結果であることを明らかにした。他方、安藤忠雄は10代の頃プロボクサーとして活動しながらも、幼少の頃よりものづくりや建築に興味を示していた。僅かなアルバイト代からコルビジェなどの作品集の古本を購入し、それらの建築物に対するあこがれだけでなく、コルビジェと彼自身の人生を重ね合わせることで創作意欲を保持していたと、自身の著作で述べている。

発表者は、相反するような作風が現れた原因には、いくつか考えられると仮説を立てるに至った。第一に、幼少から青年期にかけての原空間体験に起因するもの。第二に、その後の社会とのかかわり合いの中で醸成されたもの。最後に社会的名声を得た後、アーティストとして当初掲げた概念に変容を来したこと。それと同時に、名声に比例して大きな計画を手がけるようになったことが、アーティスト自身の眼がプロジェクト全体にバランスよく行き渡らなくなったこと。これらの要因が複合的に作用した結果であると考えられる。

そこで、本発表においては、フンデルトヴァッサーの最大の計画であるブルマウ温泉村と現時点で安藤忠雄の最大のそれである淡路夢舞台の事例の比較検討を行いたい。両プロジェクト共、発表者が現地踏査を行い、施設内容の類似性や空間構成・意匠上の特徴を把握しており、空間構成要素の比較を写真中心に行い、果たして彼らが本当に「環境と共生」する建築をつくり得たのかについて明らかにすると同時に、前段の要因との関係についても考察したい。